



3 力国民衆会議 2018

危機の **21** 世紀を超えて、つながりあい、
食の幸せを未来に手わたすために

2018 年 11 月 20 日 (火) ～ 11 月 22 日 (木)

開催報告書

目次

3 カ国民衆会議実行委員会設立趣意	3
3 カ国民衆会議開催経緯	3
全体プログラム	4
実行委員会参加者・団体	4
開催概要	5
各イベントの概要と登壇者	13
農村・農家交流	16
市民社会会合(11月20日・22日)	17
サイドイベント(11月24日・25日)	17
3 カ国民衆会議呼びかけ人・団体	21
クラウドファンディング協力者(敬称略)	21
掲載メディア一覧	22

3 カ国民衆会議実行委員会設立趣意

21 世紀に生きる私たちは、未来の世代にどのような「食」と「農」を手渡していけるでしょうか？ そのためにどのような「農」を取り戻すことが出来るでしょうか？

いま、日本だけでなく、世界各地で「食」とそれを支えてきた農家は深刻な危機に直面しています。「食」はなくてはならない命の源です。これまで私たちは、食卓にのぼる「食」の多くを「家族による小さな農業(家族農業)」に頼ってきました。しかし、いま、これまでの「農」の営みが続けられないところまで、世界中の農家は追いつめられています。

その原因に、もうけを最重要視する投資や企業によって構築されるグローバル・フードシステム、それを推進する各国政府や国際機関の政策、地球温暖化などによる異常気象があります。国によってその影響は異なりますが、家族農家の手から、農地・水・たね(種子)・森へのアクセス、そして「どこで何をどう育てるのか」の決定権が急速に奪われつつあります。いつの間にか遺伝子組み換え作物が栽培され、みなさんの口に入ってしまったという現状もその一例です。農家の苦境は、「食」の受け取り手でもある私たちが、「どこで誰の育てた何をどう食べるか」の選択肢と決定権を失うことにもつながっています。つまり、「食」と「農」の支配を通じて、一人ひとりの生き方や生命までもが左右される時代となっています。

グローバリゼーションの負の影響をもっとも深刻な形で受けた「南(途上国)」の先住民民族や家族農業を営む人びとですが、何重にも及ぶ圧力を受けながらも、それを乗り越えるための創意工夫を積み重ねてきました。「母なる地球(マザーアース)」、「食の主権」、「たねへの権利」、「アグロエコロジー」、「小農の権利／主権」——これらのビジョンや実践は、国境を超えた人びとと土の連帯を通じて、世界に広がり、多くの素晴らしい変化を生み出してきました。来年には、「国連家族農業の 10 年」が始まります。

これを受けて、日本の私たちは、アフリカのモザンビーク、南米のブラジルから来日する農民男女、教会関係者、女性運動、環境や人権団体、若手研究者の皆さんとともに、多様性を大事にし、「食と農の未来」を描き、課題を整理し、これらを乗り越えるための方策と計画を話し合うことになりました。

3 カ国の人びとの出会いを通じて、みなさんの「共通の家」であるはずのこの地球、自然、地域社会、農家、一つひとつの命を守り、つながりと主権を土台とした幸せと喜びあふれる「食」と「農」の関係を未来の世代に手渡せるよう、力をあわせたいと思います。

2018 年 8 月 3 日

3 カ国民衆会議開催経緯

日本・モザンビーク・ブラジルの市民社会による「3 カ国民衆会議(Triangular Peoples Conference／三角民衆会議)」のアイディアは、モザンビーク最大の小農運動「全国農民連合(UNAC)」による提案に端を発しています。そして、2013 年 8 月に、第 1 回「3 カ国民衆会議」がモザンビークの首都マプトで、300 人近い参加者の大半をモザンビークの小農が占める中、開催されました。この第 1 回民衆会議以降、世界の農業と食を取り巻く環境は、大規模農業開発計画の実施や、気候変動、企業や政府による土地収奪など、大きく変化してきました。一方で、それらの変化に対して世界各地で小規模農業を営む人々は反対の声をあげ、これらに与しない試みを行ってきました。そうした草の根レベルでの動きが実を結び、2018 年 11 月に国連で「小農と農村で働く人びとの権利に関する国連宣言」が賛成多数で採択され、12 月の国連総会で決議されました(日本は棄権)。

今回の「3 カ国民衆会議」は、多様性の尊重と互いの尊厳を土台としながら、2018 年 11 月 19 日から 21 日の 3 日間にわたって、東京で開催されました。今回の会議では、(1) アフリカ、南米、アジアの 3 つの地域・国の農民と人びと(民衆)が出会い、(2) 互いの課題や試みを紹介しあいながら、(3) 3 カ国の関係を政府主導の「上から」ではなく、民衆同士による横の関係に転換し直すこと。そして、(4) 未来に向かって、ともに、またそれぞれが、何をどう取り組んでいくのかについて話し合うこと。その上で、(5) 話しあった結果を社会と世界に広く発信する。そして、(6) みなで決めた取り組みを一つでも実現していくことで、(7) みなさんの「共通の家」であるはずのこの地球と一人ひとりの命を守り、未来の世代につながりと主権を土台とした幸せと喜びあふれる「食」と「農」の関係を手渡せるよう力をあわせることを目指し、日本、モザンビーク、ブラジルの 3 カ国からのべ 350 名を超える人々が集まりました。

全体プログラム

3カ国民衆会議では、3日間の一般公開したイベントの他、農村・農家交流(11月18-19日／千葉県自給農園ミルパ)、また11月20日(10:00～14:00／聖心女子大学4号館)、11月22日(10:00～15:00)に、3カ国の市民社会会合をクローズドで開催しました。

また、独立イベントとして、11月21日(9:00～11:00/12:00～14:00／参議院議員会館)に財務省・JBIC(国際協力銀行)と外務省・JICA(国際協力機構)との政策協議、11月23-25日に山形県置賜での農村・農家交流、11月24日-25日に京都での二つのセミナー、11月25日に横浜でのセミナーを開催いたしました。

実行委員会参加者・団体

池上甲一(近畿大学名誉教授)／茂住衛(特定非営利活動法人 アフリカ日本協議会 AJF)／船田クラーセンさやか(明治学院大学国際平和研究所研究員)／渡辺直子(特定非営利活動法人 日本国際ボランティアセンターJVC)／西崎伸子(福島大学行政政策学類教員)／古沢広祐(國學院大學教授)／山中一耕(風の里ヤマナカ農場)／岡田直子(特定非営利活動法人 アースマンシップ)／受田宏之(東京大学教員)／西川 潤(早稲田大学 名誉教授 / 連帯経済フォーラム発起人)／斉藤 龍一郎(特定非営利活動法人 アフリカ日本協議会 AJF)／津山 直子(特定非営利活動法人 アフリカ日本協議会 AJF)／松平尚也(有機・小規模農家、京都大学農学研究科博士課程 小農研究)／大橋正明(聖心女子大学教授/恵泉女学園大学名誉教授)／印鑰智也(日本の種子(たね)を守る会事務局アドバイザー)／ロマンアルカラ佳奈(Seed Library Network)／森亮介(3カ国民衆会議プロボノファンドレージングチーム)／大林稔(モザンビーク開発を考える市民の会)／白鳥清志(アフリカ理解プロジェクト)／浅岡みどり(立教大学大学院博士課程、恵泉女学園大学講師)／鈴木敬太(3カ国民衆会議プロボノファンドレージングチーム)／マッカーティン・ポール(聖コロンバン会)／小林舞(総合地球環境学研究所研究員)(非公開3名、計26名)

特定非営利活動法人 日本国際ボランティアセンター(JVC)／特定非営利活動法人 WE21 ジャパン／農民運動全国連合会／TPPに反対する人々の運動／モザンビーク開発を考える市民の会／日本の種子(たね)を守る会／アフリカ日本協議会(計7団体)

開催概要

DAY 1

日本の私たちと今世界で「大豆」をめぐる起こっていること ～アグリビジネスによる油糧・飼料作物栽培の環境・社会的影響と住民の抵抗～

【日時】 2018 年 11 月 20 日 (火) 18:00～20:00

【会場】 聖心女子大学 4 号館 聖心グローバルプラザ 4-2 教室

【主催】 国際 NGO・GRAIN

【共催】 特定非営利活動法人 日本国際ボランティアセンター、3 カ国民衆会議実行委員会
聖心女子大学グローバル共生研究所、グローバル・フードシステムを考える市民グループ

【協力】 モザンビーク開発を考える市民の会

【助成】 地球環境基金(西・中央アフリカにおける油ヤシ・プランテーション産業拡大に対応する
ためのコミュニティ能力強化と地域プラットフォームの形成)、公益財団法人 庭野財団

【参加人数】 65 名

【概要】 世界で油や飼料として使用されている大豆。工業的な大豆の大量生産のため、広大な農地でモノカルチャー(単一作物)栽培が行われている。このイベントでは、大豆栽培に関連して起きている森林伐採や土地収奪などの環境面、社会面での深刻な影響について、世界で何が起きているのかを把握し、その主要な生産地であるブラジル・セラードの地域社会で何が起きているのかをコミュニティの側から具体的に紹介し、また日本社会ができることについて検討、議論した。



DAY 2

日本・モザンビーク・ブラジル 3カ国民衆会議 国際シンポジウム ～危機の 21 世紀を超えて、つながりあい、食の幸せを未来に手わたすために～

【日時】 2018 年 11 月 21 日 (水) 15:00～17:30 (第一部)、18:00～20:40 (第二部)

【会場】 聖心女子大学 4 号館 聖心グローバルプラザ 3 階 ブリット記念ホール

【主催】 3カ国民衆会議実行委員会

【共催】 聖心女子大学グローバル共生研究所、グローバル・フードシステムを考える市民グループ、モザンビーク開発を考える市民の会

【協賛】 パルシステム東京、聖コロンバン会

【助成】 ソーシャル・ジャスティス基金、認定 NPO 法人 高木基金、公益財団法人 庭野財団、MISEREOR

【参加者数】 209 名

【概要】 利益を重視する投資や企業により構築されるグローバル・フードシステム、それを推進する各国政府や国際機関の政策、地球温暖化などによる異常気象などを背景に、世界各地で「家族による小さな農業」が危機に直面している。一方で、グローバリゼーションの負の影響をもっとも深刻な形で受けた「南(途上国)」の先住民族や小さな農業を営む人びとは、それを乗り越えるための創意工夫を積み重ねてきた。

第一部では「食とたね」に焦点を当てて、日本、モザンビーク、そしてブラジルの課題・現状とオルタナティブな取り組み事例の紹介を行い、農家、料理研究家、活動家など異なる立場でこの問題に取り組むパネルによるディスカッションを行った。第二部では、食と農、くらしと地域の自立をテーマに、各国で実施されているオルタナティブな取り組みが紹介され、3カ国で活動するスピーカーによるパネルディスカッションが行われた。

会場では、本会議を支援する団体・個人による、種の交換会、写真展、展示発表、農作物、食品、書籍等の販売が行われた。また、モザンビーク農民女性による歌が披露された。

【第一部】





【第二部】



【たねの交換会】

種の出品者: 霜里農場 金子友子／一反百姓「じねん道」 斎藤博嗣／べにや長谷川商店／風の里ヤマナカ農場 山中一耕／のり・たま農園 玉山ともよ



【マルシェ&ファーマーズマーケット】

出展者: 築地書館、明石書店、東京大学出版、農山漁村文化協会、メノビレッジ長沼、カフェモザンビコ・プロジェクト、たねと食とひと@フォーラム、一反百姓じねん道、特定非営利活動法人 APLA、農民連ふるさとネットワーク



【写真展】「モザンビーク農民の“No”」の歴史的ルーツを辿る～小川忠博写真展」



【展示】 聖心女子大学 学生団体 Earth in Mind「日本における現代の食問題」



DAY 3

【緊急報告会】日本と ODA／投資：モザンビーク北部で何が起こっているのか ～プロサバンナ事業とナカラ回廊開発に抗う農民たち～

【日時】 2018 年 11 月 22 日 (木) 17:00～19:00

【会場】 参議院議員会館 会議室 B107

【主催】 3 カ国民衆会議実行委員会

【共催】 プロサバンナにノー！キャンペーン(モザンビーク)

【協力】 特定非営利活動法人 日本国際ボランティアセンター、No! to landgrab Japan、
特定非営利活動法人 アフリカ日本協議会、モザンビーク開発を考える市民の会、

【助成】 ソーシャル・ジャスティス基金、認定 NPO 法人 高木基金、公益財団法人 庭野財団、MISEREOR

【参加人数】 82 人

【概要】 アフリカ・モザンビーク北部(ナカラ回廊地域)での日本の援助事業「プロサバンナ」に地元農民が反対を表明してから 6 年が経過した。今回来日したモザンビーク・ブラジルの代表団は、事業下で悪化する現地状況を受けて、日本の官民が巨額の資金・税金を投じて開発を進める同地域で何が起こっているのかを広く日本の市民に伝えるため、緊急報告会を開催した。会合では、プロサバンナ事業の 10 年を振り返り、現地からの報告を行うとともに、事業の実施主体である JICA(国際協力機構)および外務省の担当者を招き、プロジェクトの抱える課題と今後の取り組みについて議論を行った。JICA からは、農村開発部部長の宍戸健一氏が登壇し、同部より浅井誠氏、山下契氏が出席、外務省からは国際協力局国別開発協力第三課長井関匡康氏が登壇、河邊章子氏が出席した。

また、緊急報告会の前には記者会見を開催し、テレビ、新聞、雑誌、インターネットメディアなどから多くの参加者を集めた。



各イベントの概要と登壇者

DAY 1: 日本の私たちと今世界で「大豆」をめぐる起こっていること ～アグリビジネスによる油糧・飼料作物栽培の環境・社会的影響と住民の抵抗～

世界で生産されている「大豆」の大半は、油と飼料として使用されています。その多くが遺伝子組み換えのもので、工業的な大量生産のため、広大な農地でモノカルチャー(単一作物)栽培が行われています。大豆は「油糧作物」とも呼ばれ、その栽培にあたっては、世界中で多くの企業が森林伐採や土地収奪などを行っており、環境面でも社会面でも深刻な影響をもたらしています。日本との関係の深い「大豆」をめぐる世界で何が起きているのか、その主要な生産地であるブラジル・セラードの地域社会で何が起きているのかをコミュニティの側から具体的に紹介します。



渡辺 直子 (日本国際ボランティアセンター)

現在、南アフリカ事業担当/地域開発グループマネージャー。2012 年より日本がブラジルとモザンビークで進める ODA 農業開発事業「プロサバンナ」や土地収奪問題の現地調査に従事。2016 年度より、GRAIN の事業(西・中央アフリカにおける油ヤシ・プランテーション産業拡大に対応するためのコミュニティ能力強化等)の日本との橋渡し役として、西・中央アフリカでのランドグラブ問題にも関わる。



平賀 緑 (立命館大学非常勤講師)

かつて丹波の小さな畑にて有機菜園と鴨たちを育て、手づくりバイオディーゼル燃料で車を走らせ、持続可能な食とエネルギーを促す適正技術を紹介。その後、ロンドン市立大学(食料栄養政策学修士)取得。京都大学大学院で農業・食料の国際政治経済学を学ぶ(経済学博士)。現在、立命館大学の非常勤講師のほか、京都大学経済学研究科経済資料センター研究員。



ジアナ・アギアール (リオ連邦大学大学院/FASE)

2014 年からリオ連邦大学の都市・地域計画研究科博士課程に在籍(国際関係学修士)。アグリビジネスのための貿易回廊開発の研究を行う。ブラジル NGO の連合組織である FASE(社会・教育支援団体連盟)の国際部門アドバイザーでもある。2012 年から 2015 年まで、トランスナショナル研究所(TNI、アムステルダム)の研究員。2008 年から 2010 年まで国際ジェンダー貿易ネットワーク(IGTN)のグローバル・コーディネーターを務める。本年 EU 議会にて、油糧作物栽培プランテーションの問題に関する講演を行った。FASE: <https://fase.org.br/en/>



イブレッチ・ウシニエスキー (セラードを守る全国キャンペーン/ CPT)

エコノミスト(ゴイアス・カトリック大学:PUC/GO)。2005 年、ゴイアス州のカトリック土地司牧委員会(CPT)のリージョナル・コーディネーターに就任。2009 年に CPT の全国コーディネーターに選出。2015 年から 2018 年にかけて、セラード地域に関する活動の重点化に貢献した。現在、「セラードを守る全国キャンペーン」のコーディネーターを兼任する。2018 年 4 月、CPT の全国執行コーディネーターに選出。本年、ニューヨーク市立大学にて、セラード地域の住民が直面する土地収奪と環境破壊問題の講義を行った。



印鑰 智哉 (日本の種子(たね)を守る会事務局アドバイザー)

アジア太平洋資料センター(PARC)、ブラジル社会経済分析研究所(IBASE)、オルター・トレード・ジャパン政策室室長を経て、現在はフリーの立場で世界の食と農の問題を追う。ドキュメンタリー映画『遺伝子組み換えルーレット』、『種子ーみんなのもの?』日本語版企画・監訳。

DAY 2: 日本・モザンビーク・ブラジル 3カ国民衆会議 国際シンポジウム ～危機の 21 世紀を超えて、つながりあい、食の幸せを未来に手わたすために～

いま、世界各地で「食」とそれを支えてきた「家族による小さな農業(家族農業)」は深刻な危機に直面しています。その背景に、もうけを重視する投資や企業により構築されるグローバル・フードシステム、それを推進する各国政府や国際機関の政策、地球温暖化などによる異常気象があります。その一方で、グローバリゼーションの負の影響をもっとも深刻な形で受けた「南(途上国)」の先住民族や小さな農業を営む人びとは、それを乗り越えるための創意工夫を積み重ねてきました。「食の主権」「たねへの権利」「アグロエコロジー」これらのビジョンや実践は、国境を超えた連帯を通じて世界に広がり、多くの素晴らしい変化を生み出してきました。

モザンビークとブラジルから来日する皆さんとともに、「食と農の未来」を描き、課題を整理し、これらを乗り越えるための方策を話し合いたいと思います。



西崎伸子(福島大学):福島大学行政政策学類准教授。エチオピアにて野生動物保護をめぐる紛争、地域に根差した保全活動、狩猟活動と野生動物保護の共存に関する研究を行う。また「観光」という視点から、人びとの暮らしだけではなく、地域がおかれた状況を国際社会に発信している。福島子ども保養プロジェクトにも参画。



渡辺直子(国際ボランティアセンター):2005年 JVC(日本国際ボランティアセンター)に、2015年モザンビーク開発を考える市民の会に参加。2013年から日本がモザンビークで行う ODA 事業「プロサバンナ」に関連してモザンビーク小農組織との合同調査を開始、現在までに 10 回以上の現地調査を行う。アフリカ、モザンビーク、ブラジルの市民社会組織とともに、アドボカシー活動を展開。



印鑰智哉(日本のたね(種子)を守る会)アジア太平洋資料センター(PARC)、ブラジル社会経済分析研究所(IBASE)、オルター・トレード・ジャパン 政策室室長を経て、現在はフリーの立場で世界の食と農の問題を追う。ドキュメンタリー映画『遺伝子組み換えルーレット』、ドキュメンタリー映画『種子ーみんなのもの?』いずれも日本語版企画・監訳。



ジルベルト・シュナイダー(ブラジル小農運動 MPA/ ピアカンペシーナ):2004 年からブラジル小農運動(MPA)に参加。現在ディレクター。ピア・カンペシーナの一員として、クレオール種(伝統的な固定種)やアグロエコロジーに関する提言を行う。サンタカタリーナ州の植物燃料協同組合で、組合管理や種に関するテクニカルアドバイザーを務めた。2015 年には FAO のアグロエコロジー国際フォーラムに参画。



玉山ともよ(のり・たま農園):兵庫県篠山市在住。夫の坂口典和と共に「のり・たま農園」を経営。約 8 反の田畑で無農薬・無化学肥料で年 50 種の野菜を栽培。8 品目の野菜セット(週 2 回)月 160~200 箱を個人や飲食店に出荷。総合研究大学院大学博士課程在学時、米国先住民民族コミュニティのウラン鉱山開発の問題を研究。篠山市原子力災害対策検討委員会委員。3 児の母(高 2、中 2、小 4)。



金子友子(埼玉県小川町 霜里農場)化学肥料・農薬等に依存せず、身近な資源(自然エネルギー)を生かし、食物だけでなくエネルギーも自給して自立する農法を目指し、「小利大安(小さい利益でも大きな安心)」をモットーに 1971 年より埼玉県小川町で有機農業を続けている。



斎藤博嗣(一反百姓「じねん道」/小規模・家族農業ネットワーク・ジャパン(SFFNJ)):2005 年に東京から茨城へ夫婦で移住し新規就農。2017 年 SFFNJ 設立に参画し国連『家族農業の 10 年(2019~2028 年)』を支持するとともに日本および世界で小規模・家族農業の役割と可能性を再評価し農業・食料政策の中心に位置づけることを求める活動を進めている。



枝元なほみ(料理研究家):料理家・家庭料理を考える仕事。＜食べる＞と＜生きる＞はくっついている。農業や種子を守ることにも取り組んで、子供たちが飢えない未来のために働きたい。キッチンの窓を開けて社会とつながりたい、と思っている。



松平尚也(AM ネット/耕し歌ふあーむ):1995 年に AM ネット立ち上げに関わり、現在代表理事。WTO 等の会議に参加しグローバルな農の問題に関わりつつ 2010 年に就農。耕し歌ふあーむを設立。伝統野菜等の宅配事業の傍ら京都大学農学研究科で小規模農業について農家の視点から研究している。



イゾレッチ・ウィシニエスキー(セラードを守る全国キャンペーン /CPT):2005 年、ゴイアス州のカトリック土地司牧委員会(CPT)の地域コーディネーターに就任し、2009 年に CPT の全国コーディネーターに選出。2015 年から 2018 年にかけて、セラード地域に関する活動の重点化に貢献。現在、「セラードを守る全国キャンペーン」のコーディネーターを兼任。



小池絢子(特定非営利活動法人 WE21 ジャパン民際協力室):2013 年より WE21 ジャパンに参加。民際協力事業を主に一部共育事業(啓発活動)、政策提言事業を担当。2013 年より「プロサバンナ」に関わる問題へのアドボカシー活動に参加。当問題に対する地域市民への関心を高めることを目指している。



大橋正明(聖心女子大学教授 /恵泉女学園大学名誉教授):現、聖心女子大学グローバル共生研究所長として国際開発学、NGO 論、南アジア地域研究などの教鞭をとる。シャブラニール=市民による海外協力の会のバングラデシュ駐在員と事務局長や赤十字バングラデシュ駐在員として、サイクロン防災・救援、難民支援などに従事した経験をもつ。国際協力 NGO センター(JANIC)、ふるさと回帰支援センター理事。



ジアナ・アギアル(ブラジル、FASE):2014 年からリオ連邦大学の都市・地域計画研究科博士課程に在籍。アグリビジネスのための貿易回廊開発の研究を行う。ブラジル NGO の連合組織 FASE(社会・教育支援団体連盟)の国際部門アドバイザー。トランスナショナル研究所(TNI、アムステルダム)の研究員、国際ジェンダー貿易ネットワーク(IGTN)のコーディネーター等を務める。



山本奈美(耕し歌ふあーむ/京都大学大学院):京都で農場を家族で運営。「里山のめぐみを畑から食卓へ」をコンセプトに、お米やお野菜を「里山のおすわけ定期便」という名前で販売。友人らと小さなケータリングビジネス(「にじいろごはん」)を運営。京都大学博士課程にて、国内外の「オルタナティブ・フード・ネットワーク」を研究。「考えて発信して作って食べる小さな農家」を目指す。



池上甲一(近畿大学名誉教授):京都大学近畿大学で教育・研究に従事。農業社会経済学の構築を目指し、農業・食料、水・環境、フェアトレード、大規模農業投資などについて研究しながら、日本、アフリカ、タイの村を歩き回っている。著書に『食の共同体』(編著、ナカニシヤ出版、2008 年)、『食と農のいま』(編著、ナカニシヤ出版、2011 年)、『農の福祉力』(単著、農山漁村文化協会、2013 年)など。国際農村社会学会現会長。



天明伸浩(星の谷ファーム):1995 年新潟県上越市吉川区に夫婦で 1 ターン就農。「星の谷ファーム」を立ち上げる。妻と娘 3 人の家族農場経営。水稻(7ha)・ブルーベリー(30a)・採卵養鶏(100 羽)・農産加工(瓶詰め)。農民という立場から社会活動に関わり、世界の問題にも目を向けている。アジア農民交流センター世話人日本国際ボランティアセンター(JVC)理事、上越市農地最適化推進委員。



プロサバンナにノーキャンペン加盟団体(モザンビーク小農運動を含む)。写真は第二回 3 カ国民衆会議の様子。

* 参加団体一覧は次頁をご覧ください。



船田クラークセンさやか(明治学院大学国際平和研究所): 明治学院大学国際平和研究所研究員。国際関係学博士。元東京外国語大学大学院教員。現在、自給農を目指しながら、ヨーロッパ・アフリカ・南米の小農や研究者・市民社会をつなぐ活動に従事。主・共著書に『モザンビーク解放闘争史』(御茶の水書房)、『解放と暴力植民地支配とアフリカの現在』(東京大学出版会)。編著に『アフリカ学入門』

DAY 3

【緊急報告会】日本と ODA／投資:モザンビーク北部で何が起きているのか ～プロサバンナ事業とナカラ回廊開発に抗う農民たち～

アフリカ・モザンビーク北部(ナカラ回廊地域)での日本の援助事業「プロサバンナ」に地元農民が反対を表明してから 6 年が経過しました。この度来日するモザンビーク・ブラジルの 20 名の代表団は、事業下で悪化する現地状況を受けて、日本の官民が巨額の資金・税金を投じて開発を進める同地域で何が起きているのかを「ぜひ幅広い層の日本人たちに知ってほしい」ということで、この度【緊急報告会】を開催することにいたしました。

かつて「人びとのため」だった援助は現在、官民連携を推進する日本政府により堂々と「投資・貿易のための援助」と謳われています。本当にこれでいいのでしょうか。日本の貴重な税金の使われ方はどうあるべきなのか。モザンビークの農民や市民社会の皆さんの声に耳を傾けながら、参加者とともに一緒に考えたいと思います。



大林稔(龍谷大学名誉教授/モザンビーク開発を考える市民の会): 早稲田大学大学院経済学研究科で博士課程終了。民間企業、在ザイル大使館(経済担当専門調査員)、貿易研修センター(専任講師)、UNDP ブルンジ事務所(シニアエコノミスト)、在フランス大使館(アフリカ担当専門調査員)、などを経て現職。アフリカの内発的発展と援助などのフィールドに携わる。【当日はアフリカ日本協議会代表 津山直子が代行】



渡辺直子(日本国際ボランティアセンター): 南アフリカ事業担当/地域開発グループマネージャー。2012 年より日本がブラジルとモザンビークで進める ODA 農業開発事業「プロサバンナ」や土地収奪問題の現地調査に従事。2016 年度より、GRAIN の事業の日本との橋渡し役として、西・中央アフリカでのランドグラブ問題にも関わる。



ジルベルト・シュナイダー(ブラジル小農運動 MPA/ピアカンペシーナ): 2004 年からブラジル小農運動(MPA)に参加。現ディレクター。ピア・カンペシーナの一員として、クレオール種(伝統的な固定種)やアグロエコロジーに関する提言を行う。サンタカタリーナ州の植物燃料協同組合で、組合管理や種に関するテクニカルアドバイザーを務めた。2015 年には FAO のアグロエコロジー国際フォーラムに参画。



船田クラークセンさやか(明治学院大学国際平和研究所): 国際関係学博士。元東京外国語大学大学院教員。現在、自給農を目指しながら、ヨーロッパ・アフリカ・南米の小農や研究者・市民社会をつなぐ活動に従事。主・共著書に『モザンビーク解放闘争史』(御茶の水書房)、『解放と暴力植民地支配とアフリカの現在』(東京大学出版会)。編著に『アフリカ学入門』。

モザンビークからの来日・参加団体: モザンビーク弁護士会(OAM)、女性フォーラム(Fórum Mulher)、世界女性マーチ(Marcha das Mulheres/Mozambique)、環境団体(JAI)、農村開発を考えるアカデミック・アクション(ADECRU)、環境団体 Livangingo、モザンビーク農民連合加盟農民、カトリック教会・ナンブーラ大司教区正義と平和委員会(計 14 名)。

*モザンビークの登壇者は、帰国後の人権侵害を避けるため、個人名の表示をしておりません。



農村・農家交流

2018 年 11 月 18 日-19 日 千葉県成田市・ミルパ農園



2018 年 11 月 23-24 日：埼玉県小川町霧里農場(金子美登さん、友子さん：モザンビーク 2 名、東京からの同行者 3 名)



2018 年 11 月 23-25 日：山形県置賜(女性(中心)の加工品税増・直販グループ、置賜百姓交流会・ノラの会・置賜自給圏推進機構・レインボープラン、大豆種子生産農家訪問、地域の微生物を活用した放し飼い養鶏・稲作・産直農家：モザンビーク 2 名、東京からの同行者 4 名、現地受け入れ側 10 名)



市民社会会合(11月20日・22日)

3カ国国民衆会議では、3日間の一般公開したイベントの他、農村・農家交流(11月18-19日/千葉県自給農園ミルパ)、また11月20日(10:00~14:00/聖心女子大学4号館、約50名)、11月22日(10:00~15:00、約30名)に、3カ国の市民社会会合をクローズドで開催しました。

11月20日は、初顔合わせということで、「食と農の課題」と「オルタナティブな試み」について、3カ国の農家と市民が、それぞれ発表を行い、互いの理解を深めました。日本の農家の参加者の皆さんからは、事前にプロフィールを提供いただき、プロフィール集を作成・配布いたしました(<http://triangular2018.blog.fc2.com/>)。

最終日の11月22日は、「東京宣言」の作成と今後に向けた行動計画を話し合いました。



サイドイベント(11月24日・25日)

2018年11月25日: 神奈川「大豆から考える食の今と未来～モザンビーク・ブラジル・日本で起きていること」
認定NPO法人WE21ジャパン(モザンビーク2名、東京からの同行者3名、イベント参加者25名)



2018 年 11 月 24 日： 京都「日本の農業政策と海外への農業開発支援を問う ～ ブラジルとモザンビークからの証言」 グローバル・ジャスティス研究会

2018 年 11 月 25 日： 京都「マーケットが(まもる・つくる・つながる)くらし」 FEAST プロジェクト
(モザンビーク 2 名、ブラジル 1 名、参加者 40 名)



日本の参加者による行動方針まとめ

わたしたちは、2018 年 11 月 20 日～22 日に東京で開催された 3 カ国民衆会議で議論された、日本、モザンビーク、ブラジルにおける人びとの「食の主権」が脅かされる問題の構造と解決に向けての今後の行動計画について話し合いました。

日本においても、小農の権利は軽視されています。大規模農家にはさまざまな補助金が提供され、大規模農家しかつかえない新しい技術(無人トラクターなど)が大学等で開発されているのに対し、小農への支援は僅かです。小農は、生計を維持するだけでなく、多品種の作物を育て、付加価値のある作物を栽培し、種(たね)の多様性を守り、環境を維持し、地域の活動を共同体でおこなってきました。しかし、小規模であるがゆえに「生産性が低い」とされ、小農による多様な営みを正当に評価されてきませんでした。製品(商品)には厳しい一方で、食べ物を育ててきた農家に関心を示してこなかった消費者もその構造を支えてきました。このような日本の小農をめぐる状況が、大豆の自給率 7%という現状や、モザンビークおよびブラジルにおける大規模開発を推進させ、「援助」と言いながら、現地の人々の人権を侵害し、環境を破壊しているのです。

このような問題に対していくつかの解決策が提案されました。ひとつは農民がつながり、学び合うということです。日本にはいくつかの農業者による組織があり、個別に政府と政策を協議したり、各地域で食や農に関する勉強会を開催したり、政策協議をしたりしてきました。その一方でピアカンパシーナ(世界最大の小農によるグループ)のような組織横断的な運動を展開してきませんでした。今後、各地域での活動(行動計画を作成するなど)に大都市の消費者が参加する機会をつくるなど、大きなネットワークを育てていきたいと考えています。「小農の権利宣言」や「家族農業の 10 年」の理念は、個別具体的な課題を越えて、生産者・消費者・流通者・ローカル・グローバルでつながりあえる鍵になります。来年はじめに、この二つを根拠にして、日本政府と食と農に関する政策協議をおこない、また、その準備のための市民会合を開催することを計画しています。そこでは、プロサバンナ問題にもとりくむ予定です。

2018 年 11 月 22 日

東京宣言

～プロサバンナ事業とマトピバ計画を再度拒否し、人びとの食の主権を守る～

我々、モザンビーク・ブラジル・日本の小農運動および市民組織は、2018年11月20日から22日の3日間、第4回「3カ国民衆会議」のために日本の東京に集結した。我々は会議の前日に日本の小農の農園を訪問し、小農による農業について貴重な経験を分かち合い、この数年間で築き上げた連帯を強化した。

我々は日本の市民社会および広く一般の人びとと共に、アグリビジネス資本が我々の土地やテリトリーにおいて進める小農による農業を排除した活動計画を衆目に晒した。この活動計画こそ、3カ国政府および企業と提携する日本の国際協力機構(JICA)によって推進されるモザンビークでのプロサバンナ事業およびブラジルでのマトピバ計画である。プロサバンナ事業ならびにマトピバ計画は、企業利益を主眼とする大規模なコモディティ生産のために考案された農業事業であったにもかかわらず、事業の最近の関連文書にはこれらの事業が農村開発および食料安全の保障のためであるなどと書かれている。

3カ国民衆会議は、この種の強制力を伴った農業事業への民衆側からの抵抗に関し、数々の実践を、我々の間で平等に共有することを可能にした。その中には、モザンビーク、ブラジルそして日本におけるアグロエコロジーの具体的な体験が含まれている。日本での一連の話し合いと協議、並びに JICA、外務省、財務省、国際協力銀行(JBIC)の各代表との会議を受けて、我々はモザンビークでのプロサバンナ事業そしてブラジルでのマトピバ計画を再度拒否し、日本政府と JICA に対してこれらの事業計画の即時撤廃を要求する。

JICA はブラジルでの農業事業であるプロデセール(日伯セラード農業開発協力)事業の開始から約 40 年を経た現在においても、同事業を称賛し続けている。今回 JICA は、モザンビークではプロデセール事業を模倣しない(だから安心してよい)との趣旨の発言を行った。しかし、JICA は依然としてブラジルでこの事業がもたらした惨憺たる経験を無視し、農業協力の成功事例として宣伝に利用し続けている。プロデセール事業は、セラード地域に暮らす多様な先住民民族および内陸部住民を殲滅・追放し、彼らを従属させた。これらの先住民民族は、数世紀にもわたってセラードの生物多様性を生かした農をめぐり知恵や知識を育み、保持していたにも関わらずである。

JICA がブラジルで推進した農業は、大豆の大規模生産によるモノカルチャーを土台とし、生物多様性を蝕み、セラードの水源と土地の疲弊を引き起こしている。結果として、遺伝子組み換え大豆の蔓延、日本で使用禁止とされている化学薬品を含む農薬による水質汚染をももたらした。日本は自国の稠密な人口の食料とそのため不足する油や飼料を補うべく大豆(トウモロコシおよび小麦)の大部分を輸入に依存している。ブラジルのセラード地域を開拓最前線に変貌させるマトピバ計画は、プロデセール事業と同様のビジョンが維持された結果、社会に深刻な紛争状態を生じさせている。つまり、日本政府は、再び、民衆からの批判およびセラード開発導入に起因する過去数十年間の略奪的土地占有による社会・環境上の被害を無視することを選んだのである。

2018年11月に開催された国連総会において、日本は「小農と農村で働く人びとの権利に関する国連宣言(小農の権利宣言)」に賛成票を投じなかった。日本は投票拒否(棄権)を選択したことで我々に明確なメッセージを送ったのである。小農は権利に値しないという(国連総会での)立場を日本が表したということは、日本政府の最重要国際協力機関である JICA がモザンビークの小農たちを支持する意図を持っていると主張しても、これは矛盾でしかなく信用できない。

プロサバンナ事業とマトピバ計画は、小農層ⁱⁱへの明白な攻撃の表明を意味する。(小農の抵抗にもかかわらず)これらの計画が今まで維持されてきたことで、対象地域に住む小農自身のフードシステムに関する自己決定権が否定され続けてきたことも指摘したい。これらの事業や計画では、小農たちは受動的な客体として扱われ続けており、小農の主体的立場、小農による農業に関する知恵・知識と価値の蓄積、小農間に存在する協力と連帯の重要性が否定されている。小農が育んできた実践とは反対の異質な農業慣行と選択肢が課されることで、人びとの食の主権(食料主権)だけでなく、当該地域に住む小農の社会、文化、経済、そして環境への取り組みが侵されている。

我々は、モザンビークとブラジルの人びと、特にモザンビークのナカラ回廊およびブラジルのセラード地域に居住する人びとと連帯するよう、日本の市民社会および人びとに呼びかける。プロサバンナ事業とマトピバ計画の実施によって生じる人権侵害、そして他国の土地や領域の自然環境を破壊する「援助」事業のために、日本の公的財源から資金が

ⁱ 訳者注:「小農による農業 (agricultura camponesa /peasant agriculture)」は「小規模農業 (small-scale agriculture/agriculture by smallholders)」のことではない。地域の小農が代々培ってきた伝統的な農業のこと。

ⁱⁱ 訳者注:以上の通り「小規模農家 (smallholders)層」を意味しない。

抛出されることを拒否してほしい。同時に我々はプロサバンナ事業とマトピバ計画に対し、全面的な拒否を再度示し、以下を要求する。

- モザンビーク・ブラジル両政府は、小農組織および市民社会とともに、それぞれの国の食の主権における視点を伴った誠実で地域に根差した小農による農業の国民的計画を策定すること。
- 土地や領域の略奪的占有を引き起こし、人びとの一体性に損害を与え、組織的に人びとの人権を侵害する事業や投資を中止すること。
- JICA はプロサバンナ事業とマトピバ計画を廃止すること。
- 日本政府は、外務省および財務省を通じ、小農と市民社会による不満と訴えに責任を伴った対応をすること。
- 日本政府は、モザンビークとブラジルで行われた人権侵害の責任を関連する日本企業が果たすよう責任をもった対応を行うこと。
- モザンビーク政府は、モザンビーク弁護士会の提訴によるモザンビーク裁判所の判決に従い、プロサバンナ事業、そしてナカラ回廊で継続中の事業および投資に関する全情報を開示すること。

我々、小農と 3 カ国民衆会議に参加した市民組織は、「プロサバンナにノーキャンペーン」の団結を継続し、抵抗を続けることをここに宣言する。同時に我々は、土地、水、我々の種子(たね)と農業生物多様性を包括的に守る我々の慣習と文化に適合した小農による農業の実践を継続していく。同様に、我々の人びとの食の主権の保障として、我々の先祖たちから受け継いできた知恵・知識を尊重し未来の世代へと伝え続けることを宣言する。

プロサバンナにノー！

小農による農業と食の主権にイエス！

2018 年 11 月 22 日 東京にて

3 カ国民衆会議呼びかけ人・団体

秋元浩治(大地を守る会)、秋本陽子(ATTAC Japan 国際ネットワーク委員会)、浅岡みどり(立教大学大学院博士課程、恵泉女学園大学講師)、池上甲一(近畿大学名誉教授)、石田洋子(広島大学教授)、井上良(3 カ国民衆会議プロボノファンドレージングチーム)、印鑰智哉(日本の種子(たね)を守る会事務局アドバイザー)、受田宏之(東京大学教員)、内田聖子(アジア太平洋資料センター事務局長)、枝元なほみ(料理研究家)、大石高典(東京外国語大学教員)、大橋正明(聖心女子大学教授/恵泉女学園大学名誉教授)、大林稔(モザンビーク開発を考える市民の会/龍谷大学名誉教授)、岡田直子(特定非営利活動法人アースマンシップ)、尾崎零(日本有機農業研究会幹事、農を変えたい! 全国運動関西地域ネットワーク代表、産消循環自給農場くべじたぶる・は一つ> 代表)、菅野芳秀(置賜百姓交流会)、菊地功(東京大司教)、小林舞(総合地球環境学研究所研究員)、近藤康男(アジア農民交流センター会員/TPP に反対する人々の運動 世話人)、斉藤龍一郎(特定非営利活動法人 アフリカ日本協議会 AJF)、坂井真紀子(東京外国語大学教員)、鈴木敬太(3 カ国民衆会議プロボノファンドレージングチーム)、高橋清貴(日本国際ボランティアセンター/恵泉女学園大学教員)、津山直子(特定非営利活動法人 アフリカ日本協議会 AJF)、西川潤(早稲田大学 名誉教授/ 連帯経済フォーラム発起人)、西崎伸子(福島大学行政政策学類教員)、橋本慎司(兵庫県有機農業研究会代表)、弘田しずえ(カトリック・シスター)、船田クラーセンさやか(明治学院大学国際平和研究所研究員×自給農を目指し修行中)、古沢広祐(國學院大學教授)、マッカーティン・ポール(聖コロンバン会)、松平尚也(有機・小規模農家、京都大学農学研究科博士課程 小農研究)、茂住衛(特定非営利活動法人 アフリカ日本協議会 AJF)、山中一耕(風の里ヤマナカ農場)、山本奈美(有機農家)、吉森弘子、ロマンアルカラ佳奈(Seed Library Network)、エップ・レイモンド(メノビレッジ長沼)、渡辺直子(特定非営利活動法人 日本国際ボランティアセンターJVC)、(非公開 2 名、計 41 名)

アジア開発銀行福岡 NGO フォーラム(FNA)、アジア太平洋資料センター(PARC)、アジア農民交流センター、(特定非営利活動法人)アフリカ日本協議会、ウータン・森と生活を考える会、聖コロンバン会、(公益社団法人)全国愛農会、全国農民組織連絡会、全日本農民組合連合会、(特定非営利活動法人)日本国際ボランティアセンター、日本の種子(たね)を守る会、農民運動全国連合会(ビア・カンパシーナ加盟)、モザンビーク開発を考える市民の会、(一般社団法人)ル・モンド・ディプロマティーク日本語版の会、(特定非営利活動法人)APLA、ATTAC Japan、FoE Japan、No! to Landgrab, Japan、TPP に反対する人々の運動、(特定非営利活動法人)WE21 ジャパン(計 20 団体)

クラウドファンディング協力者(敬称略)

今回の 3 カ国民衆会議の開催実現に向けて、「3 カ国民衆会議実行委員会ユースチーム」が立ち上げたクラウドファンディングには、総額 1,417,000 円にのぼる皆様からの寛大なご支援をいただきました。

受田 宏之
枝元 なほみ
J Crawford Pegasus

青山 和佳
宮道 一千代
池上 甲一
坂井 真紀子
高橋裕子
石田 洋子

Obayashi Minoru

白鳥 清志ほか、合計 167 名。

また、各会議の会場でのカンパにも大変多くの方々よりご協力をいただきました。
皆様のあたたかいご協力、誠にありがとうございました!!

掲載メディア一覧

【新聞】

- ◆ 毎日新聞社「毎日新聞東京版」2018年11月11日付「国際シンポ 渋谷で農と食 21日、日本・モザンビーク・ブラジル民衆会議」<https://mainichi.jp/articles/20181111/ddl/k13/040/004000c>
- ◆ 産経新聞社「産経新聞」2018年11月15日付「南米、アフリカの農業問題を考えるシンポ 21日に開催 東京・渋谷」<https://www.sankei.com/life/news/181115/lif1811150024-n1.html>
- ◆ 中日新聞東京本社「東京新聞武蔵野版」2018年11月19日付「日本、南米、アフリカ 食と農業を考えるシンポ 21日、聖心女子大」
- ◆ 日本農業新聞社「日本農業新聞」2018年11月22日付「日本、ブラジル モザンビーク 3カ国の農家ら集結 小農、種子守ろう 国連の宣言採択に賛同 東京でイベント」
- ◆ 毎日新聞社「毎日新聞京都版」2018年11月23日付「報告会：日本と海外、農業の現状 あす、左京で / 京都」
- ◆ 日本共産党中央委員会「しんぶん赤旗京都版」2018年11月24日付「土地奪う援助やめて / モザンビークの農民ら告発 / 参院議員会館」
- ◆ 農民運動全国連合会「農民」 2018年12月3日付「日本・モザンビーク・ブラジル 3カ国民衆会議 プロサバナ事業は中止に 大規模開発より小規模農民守れ」
<http://www.nouminren.ne.jp/newspaper.php?fname=dat/201812/2018120302.htm>
- ◆ カトリック新聞社「カトリック新聞」 2018年12月7日付「大規模開発で土地奪われる農民 研究者、教会が連携し支援 日本・ブラジル・モザンビーク 3カ国民衆会議 2018 東京」

【インターネットメディア】

- ◆ サステナブル・ブランドジャパン 2018年11月28日付「サステナビリティ新潮流に学ぶ第23回: エシカル消費の内実を問う最新動向〜海外産品、大豆、バナナ」
http://www.sustainablebrands.jp/article/sbjeye/detail/1191202_1535.html
- ◆ dTV 2018年12月3日22時〜23時放送「News X」にて JVC 渡辺直子が会議の成果を報告
- ◆ レイバーネット日本 2018年12月4日付レイバーネット「モザンビークの農民は訴える〜JICAの農業開発にNO!」<http://www.labornetjp.org/news/2018/1122hokoku>
- ◆ 開発メディア 2018年12月20日付 ganas「JICAがモザンビーク農民の自給自足を破壊!? 日本向けの大豆を作るため土地奪う」<https://www.ganas.or.jp/20181220prosavana/>
- ◆ 開発メディア 2018年12月28日付 ganas「ブラジル中部を“世界屈指の農業地帯”に変えた JICA のセラード開発、その裏で先住民と小農が殺される」<https://www.ganas.or.jp/20181228cerrado/>

会議開催後もメディア各社が継続して記事・番組・動画を制作しています。公開され次第、ブログでご紹介いたします。会議の動画、関連情報と合わせて、3カ国民衆会議公式ブログをご参照ください。

<http://triangular2018.blog.fc2.com/archives.html>